

植田正治写真美術館

カメラの歴史は古く、紀元前にまで遡る。「カメラ・オブスキュラ」と呼ばれる、暗い部屋に穴が一つだけ空けられたのが、その起源だ。穴から入った光が反対側の壁に届くと、外の景色が逆さまに映し出された。月日は流れ1839年、フランスのダゲールが銀板写真法（ダゲレオタイプ）を発表。シルー・ダゲレオタイプ・カメラを発売した。これが世界で初めて市販されたカメラだ。技術の進歩によって近年、私たちは簡単に写真が撮れるようになり、写真を撮る人も増えた。プロ、アマ問わず多くの人たちが自分なりの構図で写真を撮る。しかし、20世紀に活躍した写真家・植田正治の作品は半世紀以上が経ったものでも、色あせることのない魅力を感じるだろう。モダンで、シュルレアリスムにも通じる彼の作品は、現代の私たちを引き込む力がある。近所の子どもたちを砂浜に並べたり、お母さんの

着物の袖を子どもたちに引っ張らせてみたり……。彼が確立した演出写真は「植田調」とされ、カメラが生まれた国フランスをはじめ、世界中で「Ueda-cho」と呼ばれて、愛されているのだ。また、アーティストの福山雅治が植田に師事を表明したことも、彼の名は幅広い世代の人に知られることとなった。そんな写真家・植田正治の作品の魅力を余すことなく伝える美術館「植田正治写真美術館」が、山陰の名峰・大山（国立公園）を臨む自然豊かな地に建っている。植田は鳥取県境町（現・境港市）の出身だが、大山を臨み、隠やかな田園が広がる風景に惚れ込み、彼自身がここ伯耆町に開館することを選んだのだ。時代の流れに飲み込まれながらも自身の作風を確立していった植田正治。美術館では彼のこだわりや写真に対する愛情、写真の可能性についても知ることができるだろう。



雄大な自然に囲まれた、コンクリート打ちっぱなしの植田正治写真美術館。一際目を惹く建物の中には、一体どんな作品が待ち構えているのだろうか。

写真するボク



〈ジャンプするボク〉 1949年頃

写真家 植田正治

生涯を通じて鳥取を拠点に写真を撮り続けた写真家・植田正治。「写真する」とは、植田が常々口にしてきた言葉である。「呼吸する」、「食事する」と同じように、彼にとって写真は生活の一部だったのだろう。60年以上、現役で写真を撮り続けた植田正治の足跡を辿ろう。